慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ウォルター・ラカー著 脇圭平・八田恭昌・初宿正典訳『ワイマル文化を生きた人びと』
Sub Title	Walter Laquar, "Weimar : a cultural history 1918-1933", translated by K. Waki, et al.
Author	中道, 寿一(Nakamichi, Hisakazu)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1981
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.54, No.1 (1981. 1) ,p.142- 149
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19810115-0142

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

ウォルター・ラカー 著
脇圭平・八田恭昌・初宿正典 訳

『ワイマル文化を生きた人びと』

一

一四年間というドイツ史の一齣にすぎないワイマル期は、その知的創造力と政治的敗北との不調和によって、ドイツ史のみならず世界史の上において特異な地位を有している。それゆえ、その不調和によつて織り成されたワイマルの多様な相貌を、短命であつたことを理由に、一義的特性をもつて規定しようとする者、ないし、一つの視角からのみ考察しようとする者は、その規定・考察から零れ落ちる諸事実のあまりの多さに概嘆せざるを得ない。まさに、「魅力的ではあつたが、まつたくもつて把握しにくい時代、これがワイマル時代であつた」(ii 頁) のである。『ワイマール共和国の反民主主義思想』の著者K・ゾントハイマーが、一九七三年の雑誌論文 (Weimar——ein deutsches kaleidoskop. mit einem Nachwort über Bonn, Merkur. XXVII. Jahrgang, Heft 6 juni 1973)において、「ワイマル共和国は、一四年間しか存続しなかつた。しかし、私の知

る限り、ドイツ史の中でこれ程、豊かであると同時に乏しく、大胆であると同時に意気消沈し、創造的であると同時に単純で、解放的であると同時に反動的であつた時期は、決して存在しなかつた。ワイマルは、これまで一度として見られなかつたような多様性において、ドイツ的可能性の万華鏡を示した」(S. 505) とし、この「万華鏡〔という言葉〕は、ワイマル期があらゆる中心的生活領域において経験した振動の総体を示すのにふさわしい表象である」(S. 507) と述べたことは、その典型的証左であろう。

ところで、ワイマルへの関心は、W・ザウアーの言うように(Wolfgang Sauer, 'Weimar Culture: Experiments in Modernism,' Germany 1919–1933–The Weimar Culture, Social Research)、歴史的経緯からして、当初、その知的創造力ではなく政治的敗北にアクセントが置かれていた。すなわち、政治と文化の区別を前提とし、ワイマルを第三帝国の前史として把えることで、ナチズムと関連した反民主主義傾向の考察が、専ら政治の分野でなされ、また、たとえ文化と関連づけられたとしても、そうした文化からなぜナチズムが生れたかという、ナチズムにアクセントを置いた考察がなされてきた。先述のゾントハイマーの著作、ワイマル体制を当時最も有力であつた諸社会集団間の一連の妥協の産物とみて「コントロールされたアナーキー」と規定するF・ノイマンの視点、そして、ワイマル期を「帝国のエピローグと第三帝国のプロローグとを均衡させる過度的段階」とみる多くの歴史家の視点は、その代表例である。

これに対して、ワイマル文化への関心は、一九六〇年代に入つて

以降、西ドイツのニュー・レフト達によるドイツ史の民主的要素への関心、現代アメリカの危機をワイマルをモデルとして分析する傾向、亡命知識人の業績の再評価、そして、亡命者自身の「黄金の二〇年代」へのノスタルジアを契機として高まってきた。最近の、フランクフルト学派の再発見は、こうしたワイマル文化復興の一環である。

確かに、ワイマル期には、「黄金の二〇年代」という別称がある。しかし、「この呼称は、もつぱら動乱と戦乱の時代と化した一九三〇年代との対比において二〇年代を特徴づけたもの」であり、ワイマルの政治的現実は「敗戦のなかで生れ、狂乱のなかで生き、悲惨のなかで死んだ」点に真実を持つのであれば、ワイマル期の全般的時代相の適切な表現ではなく、その一側面の誇張した表現と言える。にもかかわらず、ワイマル期の思想・芸術・文化の諸様相を今日ふり返えつてみる時、この呼称が必ずしも不当なものでないように思えるのは、「一九二〇年代は、きわめて多産的な、いわば『現代思想の坩堝』というべき時期であつたのであつて、今日あらためて問題とされている数多くの諸問題が、今日にそのままつながる先駆的な形で論究されていた」（生松敬三『人間への問いと現代――ナチズム前夜の思想史』NHKブックス・一〇―一二頁）からに他ならない。S・ヒューズもこの時代の意義を次のようにパラフレーズすることによつて、この呼称の使用を承認する。「一九二〇年代末のドイツは――見かけ上は繁栄と安定のうちにあつたが――ヨーロッパ社会思想が過去半世紀になにを成しとげてきたかについての経過報告をする最後の努力に恰好の舞台であつた。ヨーロッパ史上、これほど教育高く、文化的に目覚めた国民はいなかつたし、諸種のイデオロギーの葛藤がこんなに激しかつたこともなかつた。ヴァイマル体制のドイツは、すべての価値が検討に付され、『これまで人類の思想がその養分を吸い取つてきた』生きた『根が掘り出された』状況を観察するのに、まず理想的な実験室的条件をそなえていた。断崖の縁に立つてドイツ知識人のなかでも感覚鋭いひとびとは、世にいう死に臨んでの透察力を思わせるような強靱な意識をもつにいたつた」（『意識と社会―ヨーロッパ社会思想一八九〇―一九三〇』生松敬三・荒川幾男訳・みすず書房・二八四頁）。

こうしたアプローチの分裂を生み出す、文化と政治との乖理現象は、もちろん、先例がなかつたわけではないし、また、ワイマル期固有の現象でもない。しかし、「ワイマル期の場合、文化的開化と自由民主主義的政治体制の確立との間には、明白な一致が存在した」（G. K. Romoser, Social Research, p. 208）ことも否めない事実である。すでにヴィルヘルム体制下の社会において芽生えていた文化は、敗戦と革命の混乱の中から、まがりなりにではあるが成立した共和制の許容する自由の中で花開いた。たとえ、その文化が、開化を保障した政治体制の批判・蔑視ないし軽視によつて、体制の腐敗・崩壊・ナチズム台頭を黙認し、ついには祖国から追われなければならない運命を後に辿るとしても、である。ワイマル文化の問題に先鞭をつけたP・ゲイは、こうした文化のアヴァン・ギャルドの側面に焦点を当て、この文化を「インサイダーとなつたアウトサイダ

ーの文化」と規定した。

しかし、果して、ワイマル文化は、「文化」であつたのか。ワイマル文化を担つた知性のほとんどが大戦前に輩出している点もさることながら、ゲイでさえ、それを標題として掲げはしたが、概念として用いているのではなく、また、その特質に「全体への渇望」を挙げることによつて、逆に、ワイマルの「文化」の欠如を示唆しているのではなかろうかという疑問さえ生ずる。なぜなら、少くとも、ワイマル文化は、ベルリン文化に限定されるものではなかつたはずなのだから。これは、従来のワイマル知性史へのアプローチにおける対象範囲の不均衡の問題である。

こうした疑問を解決するために、文化と政治の乖理をその連関性において、そして、文化の多様性をその多様性において把握することの必要性を痛感したのは、拙稿「『ワイマル』研究の一視角—雑誌『Die Weltbühne』と『Die Tat』を中心にして」（慶應大学大学院論文集「政治篇」昭和四九年度）の執筆時であつた。それゆえ、脱稿直後に本書の原著を手にした時の興奮には、今でも忘れ得ぬものがある。

二

本書は、『知識人と政治』（岩波新書）の脇圭平氏、「ワイマル期の左翼的右翼人」（同志社大学『社会評論』）の八田恭昌氏、ライプホルツ、シュミット等の翻訳を著している初宿正典氏の手になる Walter Laquar, Weimar; A Cultural History 1918-1933（Weidenfeld & Nicolson, London. 1974）の翻訳である。著者W・ラカーは、一九二一年五月二一月ブレスラウに生まれたユダヤ系ドイツ人で、ヨーロッパ・中東の数ヶ国語に精通した、現代史研究において最も著名な歴史学者の一人であり、イスラエルのテルアビブ大学教授、ロンドンの現代史研究所所長である。主著には、Communism and Nationalism in the Middle East (1956), Young Germany (1961), Russia and Germany (1965), The Fate of the Revolution (1967), The Road to War (1968), A History of Zionism (1971) がある。

本書は、原著の「一つの文化史」という副題の示すように、「ワイマル文化史の完全な決定版を提供」するのではなく、「いい意味でも悪い意味でも、まぎれもなく最初の現代文化であつた」ワイマル文化に「一般読者の関心をよびさますこと」を目的としている。それゆえ本書は、「ワイマル文化」という言葉の不十分さを認識しつつも、ワイマル文化の個々の遺産ではなく、主として「本来それがどうであつたか」の問題にかかわることにより、時代精神の全体像をより正確に伝えることを目ざして、以下のような構成をとる。1、ポツダムとワイマルの間、2、左翼インテリ、3、右翼からの怒号—右翼インテリ、4、アヴァン・ギャルドの台頭と衰退Ⅰ—新しい文学と演劇、5、アヴァン・ギャルドの台頭と衰退Ⅱ—モダニズムと諸芸術、6、反ワイマルの大学、7、享楽のベルリン、8、「恐怖の結末」、9、今日から見たワイマル。以下、順を追つて、内容を簡単に紹介してみる。

三

著者は、一章において、まず、ワイマル共和国が「愛されない共和国」として出発しなければならなかつた理由に、西欧からの輸入品、中核となる思想・権威の欠如だけでなく、満足ではないが、自信・楽天主義・安定感のあつた「皇帝治下の生活は決して我慢できないものではなかつた」という生活実感を取り挙げ、ワイマル期に生きる多くの人々の「幸福なる過ぎ去りし日」への郷愁を指摘し、次いで、ワイマル文化の政治・経済的背景を概観する。そこでは、「革命の裏切り」という評価は行き過ぎた単純化であるとしても権力本能・権力意志の欠如した社会民主党をはじめとする諸政党、共和国の崩壊原因ではないがその欠陥・混乱の増大に力をかした比例代表制、大量失業によつて弱体化した労働組合、政治的に保守的だつた教会、旧帝制期からの継続を保持した官僚、「全くもつて保守的な」裁判官、中立をよそおう国防軍や警察、そして多くの半軍事組織の存在、右寄りの傾向をもつ教養階級、反民主主義の牙城たる大学、さらには、賠償の重圧、インフレと大恐慌の影響という、どれ一つとつても共和国存続にプラスとならない諸事実が挙げられる。しかし、だからといつて著者は、ワイマルの崩壊を既定の事実として見るのではない。「野蛮の出現は不可避でも何でもなく、ひとつの可能性以上のものではなかつた」とし、時代の風潮が初期の楽観から絶望へ、そして「最後の執行猶予の感情」へと変化したことを、ただ冷静に見つめるだけである。また、著者は、そうした政治・経済的背景の他に、都市と田園、工業と農業、カトリックとプロテスタント等の対立、新旧両思想の同時存在、知的地図における中心地の多元性といつた、当時存在した非同質的要因を指摘し、これら諸条件の下で生まれたワイマル文化を、「ひとつの公分母で割切ることの不可能な」「大小無数の石からなるモザイク」文化と特徴づけながらも、この時代は最も偉大な時代ではなかつたにしろ、「確かに創造的な時代であり、多くの新しい思想や衝動を生み出した」と評価し、それにもかかわらず、この時代を「文化的衰退と道徳的破産の時代」とみなし、ドイツは救えないという感情を抱いた多くのインテリの意識を重大視する。

それゆえ次に、著者は、左右両翼のインテリの分析に入るが、その前提として、「左右両陣営の思考様式、その表現方法、その精神構造全体は全く異質なもの」であつたが、「たつた一つ共通していたのは、双方が——理由は異なるが——ワイマル共和国の秩序と当時の現実に対して不快感をもつていたというこの動かし難い事実だけであつた」点を指摘する。まず二章では、共和国の現状と自らの理想とのギャップの大きさに、共和国拒否の最大理由をみる左翼インテリは、「立派で人道的で進歩的な大義名分を誦いながら、不幸にして他のだれからも支持されず四面楚歌の状態にあつた。この孤立感は、帰属政党をもたぬ左翼人の間に、過激主義と無責任の二つを培う結果」となり、えてして彼等の攻撃は的外れであり、自らの目的に反する結果を生んだと評価し、左翼インテリとSPD・KPD

との嫌悪感、不信感に基づく相互関係によつて政治的無力に終始しなければならなかつた左翼インテリの位置を確定する。しかし、著者は、マルクス主義を当世風に提起して、西欧に適用可能なものにすることを意図したG・ルカーチ、K・コルシュ、E・ブロッホ、フランクフルト学派等の存在を忘れはしない。特に、当時の非正統派マルクス主義の最大のセンターであり、「啓蒙思想とヘーゲル左派の伝統に根ざした、一種のマルクス主義的人道主義」を公分母にもつフランクフルト学派に対しては、彼等の関心が、マルクス主義的な社会＝経済的下部構造に限定されるものではなく、「社会的世界における唯一の創造者＝主体者としての人間」に向けられている点を挙げ、高く評価する。にもかかわらず、彼等の「批判理論」が亡命期に展開されたものであり、実践ではなく理論に強い関心を持ち、密教的な言葉を用いたことによつて、現実への影響力に限界のあつた点を指摘する。そして何よりも、その基底に、「ナチズムはそれ自体が極めて非理性的な現象であるがゆえに真面目な研究に値しない」という、大半の左翼インテリの政治一般に対する態度、すなわち、権力と精神との乖理を前提とした精神の優位の態度の一端を見定める。この態度こそ、労働者の経済的独裁と「非精神的な多数の圧制」に対するインテリの独裁＝言葉の政権としての言語政体を主張したK・ヒラー、一切の妥協を否定したK・トホルスキー等の『世界舞台』を典型とする態度に連なるものであつた。とは言え、著者は、ワイマル崩壊の責任を左翼インテリに負わせるのではない。著者はただ、「一〇〇年にわたる近代ドイツ史の負の遺産はかくも短かい期間に克服できるものでもなかつた。インテリを真に影響力をもつた地位に推し進めるためには、大きな奇蹟を必要としたであろう。依然無力なまま、かれらは目の前で展開する悲劇を外から見守つていくほかなく、長年かれらの運命と国民のそれとを形成することになつた事件の解説者でありえても、行為者ではなかつた」と述べるだけである。

こうした態度は、また、右翼インテリにも共通するものであつた。三章において、著者は、右翼インテリが、過去を美化し、そこから抽出した再建ドイツの理想像によつて共和国を攻撃したとし、また、彼等に映るワイマル文化は、「ドイツ的内面性、全体性、有機的成長、土着性とは著しく対照的な」「モダニズムによつて代弁されるもの、すなわち、魂の病、均衡の喪失、疎外と非人間化」であり、ユダヤ人の陰謀による文化的崩壊、道徳的退廃でしかなく、それゆえ、「文化的ボルシェビズム」からの「ドイツ文化」の解放をめざしたとし、さらに、大戦の不可避性、国民的恥辱としてのベルサイユ条約、反リベラル、反議会主義、反ユダヤ主義、階級闘争の否定、強力な指導者崇拝といった右翼インテリに共通する思考を指摘する。そして著者は、一般世論に寄与した右翼インテリとして、O・シュペングラー、メラー・ファン・デン・ブルック、H・グリムを、すぐれた教養・洗練された知性・独創的な精神をもつた右翼インテリとして、「ライト級の知的ボクサー」たるC・シュミット、R・クラーゲス、「経済理論の厳密な再構築を課題とした」タート派、さらに「左翼がかつた右翼人」たるナショナル・ボルシェビズム等の思

想傾向を考察し、ワイマル文化が左翼インテリのみの文化でなかつたことを示す。しかし、彼等が、権力の現実を鋭く見抜いていたナチスの前には無力な存在でしかなかつた点を強調し、次のように結論づける。「ワイマルの右翼を一つに結びつけていたものは、この体制は余りにも腐敗しており、この後にでてくるどんな政治秩序もワイマルよりもよいものだという信念であつた。彼等はドイツ中産階級の間に民主主義に対する嘲笑と軽蔑感を広めることによつて、ナチスの露払いとしての重要な役割を果したが、しかし、事態の進展に直接影響を与えることはついにできなかつた」と。

四、五章においては、ワイマル期における新しい文学・演劇・音楽・美術・建築という、ワイマル文化の最も華かな分野が取扱われる。そこには、「中産階級の青年運動であり、中庸に対する倦怠感と不満とに根ざした世界的規模における反逆」「時代の敏感な地震計」でありながら、「自由に浮動する無目的な反逆精神」であつたがゆえに短命であつた表現主義、それに対して、共和国の精神の真の代表者となつたG・ハウプトマンとT・マン、「月世界の館に移された象牙の塔に住み、自分たちがつくり出した架空の世界を現実世界と混同した」S・ゲオルゲとそのサークル、孤高の人H・ヘッセ、時代精神を代表すると同時に「現実のドイツのかかえていた諸問題に文学的表現を与ええなかつた」H・マン、Y・ヴァッサーマン、A・デープリン、A・ツヴァイク、さらにはレマルクからE・ユンガー、H・ファラダに至る若い世代の作家達、そして、「ワイマル共和国を弁護もせず、さりとてナチズムの先駆者としても活動しなかつた、なにがしかの文学的資質をもち」、「当時は過大評価され、今では過小評価されるか忘れ去られてしまつた、沈黙する大衆（田園における静かな人びと）の文学」の多くの作家達、という多彩な群像があり、G・カイザーとK・シュテルンハイムの後を継いだ演劇界の二人の新星、すなわち、演劇を社会変革の手段とみたピスカトールと、政治のなかに含まれる無限の演劇的可能性に関心を寄せ、「異化効果」へ傾斜したブレヒトが、そして音楽・美術のアヴァン・ギャルドたるシェーンベルクとカンディンスキーが、さらには、現代建築の焦点となり、ワイマル文化の国際性に寄与した「バウハウス」とグロピウスが、その豊かな才能を発揮した。しかし、それは、きら星の如く登場し、急速に没落する、束の間の栄光であつた。なぜなら、多彩な才能の開花の背後において、時代精神は大きく右旋回していたからである。著者は言う。「死を告げる鐘の音がドイツで聞かれたのは、一九三三年一月三〇日のかなり前であつた。終りは突然に訪れたのではなく、あつたのはただ漸進的なドイツの衰退であつた。かくも期待にみちてはじまり、その絶頂においていくらかの期待を実現したこの時代は、文字通りすすり泣きとともに終つた」と。

六章においては、ワイマル期の大学の性格とそこでなされた諸業績が概観される。著者は、「ワイマル文化は学校や大学の外で生み出されたものであり、ワイマル文化が大学制度に深く滲透したことは一度もなかつた」がゆえに、「大学を支配していたムードは、そもそもはじめから反共和的」であつたこと、そして、大学教授達の

政治的態度は、ほとんどが「反動そのもの」であり、ごく少数が、「親共和派—政治的必然として認めたに過ぎぬ理性的共和派」であつたことを指摘する。次いで、大学という「閉じられた扉のかげ」でなされた学問的諸業績、たとえば、自国の過去ばかりに目を向ける歴史学、ヴェーバー、マンハイム等の方法論論争を中心にした社会学、バルトやゴーガルテン、ブルンナー、ブルトマン、ブーバーを擁した神学、ゲシュタルト心理学、精神分析学の若手研究者であつたE・フロム、H・マルクーゼ、E・エリクソン、W・ライヒ、さらには科学や化学における業績が考察される。その意図は、「ワイマル文化は、一種の巨大なはめ絵で、辛胞強くかつ巧みに配列すれば全部の小片がついには適所に落ちつくだろうと決めてかかることは、残念ながらできない。共通した型や連鎖もあるにはあつたが、同様に無秩序で不均斉なものであつた」ことの例証である。

七章では、ワイマル文化の、肩のこらない軽やかな側面、すなわち、「時代全体にその痕跡を残し、かつ、その遺産の一部となつた独特の『大衆文化』」が考察される。当時のベルリンは、ヨーロッパの娯楽の首都、多くの才人の他に山師や詐欺師をも引きつける「新時代」の縮図であり、「通俗娯楽という軽装のミューズ——すなわちキャバレー、笑劇、流行歌、映画——に関する限り」、全世界的都市であつたことから、ワイマルの時代精神は、単に思想家達だけではなく、マルレーネ・ディートリヒや『カリガリ博士』によつても反映されている点が指摘され、特に、「戦争直後の時期における希望と不安、安定期における客観主義への傾向、大恐慌の衝撃と混乱」を如実に表現した映画に考察の焦点がおかれる。

八章においては、ワイマル共和国とその文化の崩壊過程が、「取り返しのつかぬ過去の一回性への、痛切な諦念」（川村二郎）をもつて考察される。著者は、その崩壊を「人の力を越えた『客観的情勢』の結果」ではなく、「無思慮な政治の失敗と経済政策の誤りの結果」であつたとし、「政治の振り子が右に振れると、文化的風潮にもはつきりした変化がでてきた」にもかかわらず、政党やインテリの状況判断は甘く、ナチ支配のきたるべき恐怖を予想しえなかつた点を再度指摘するが、たとえ彼等の行動をもつてしても事態の変化のみられなかつたであろうことを予測し、その怠慢の罪を取りたてない。著者は、一瞬、脳裏をかすめる、政治・経済の安定と回復による文化復興の可能性の仮定を、冷厳な事実の前で突き崩すことにより、ただ、「ワイマル文化の萌芽は、ワイマル共和国の誕生に先行しているが、その終りは、まさに一九三三年一月三〇日という日と一致している。有名なウンター・デン・リンデン通りに沿つたたいまつ行列とオペラ広場における焚書は、象徴的な現象以上のものであつた。それは、新しい時代の幕あけであつた」と述べるだけである。

かくして著者は、最終章の九章において、ワイマル文化の評価へと進む。もちろん、共和国の全盛時から「五〇年しか経つていない今日」では、歴史におけるワイマル文化のもつ位置についての最終判断を下しえない以上、その評価は、「暫定的な貸借対照表を呈示すること」でしかない。著者は、種々な想いを込めて、自らの、ワイマル文化への評価を、次のような文章によつて要約する。「ワイ

マル文化がモダニズムの――主たる揺籃とはいわないまでも、その――ひとつとして歴史においてその位置を占めていることは、たしかである。それは、実験の時代であつて根本的発見の時代ではなく、休むことを知らぬ外向的な時代であつて、通常われわれが≪真の偉大さ≫という概念と結びつけて考える、あのもの静かな内省に捧げられる時代ではなかつた。それはまた互いに競い合う時代であつて、綜合の時代ではなかつた。この時代には才人は豊富であつたが真の天才は欠如していた。……ワイマルの魅力が全世界的なものであつた限りにおいては、ワイマルの遺産は、われわれの時代の一般的な文化的伝統のなかにしつかりと定着しているといえる。けれども、第三のローマと同じような意味で、第三のワイマルなどといえるものは、おそらくもう二度と生じないだろう」。

四

今にして思えば、当初の興奮は、ワイマル文化の万華鏡的多様性を、その多様性のままに映しとりえた著者の豊富な知識量と類い希な分析能力、そして、ワイマルの「光」と「影」を常にバランスを保つて考察しえた、したたかな視点であつたちがいない。再び訳書という形で通読する機会を得ての印象は、P・ゲイの、切れ味の鋭さゆえに欠けていた、可能な限り全体的なワイマル文化像の構築のための、対象範囲の拡大と、そこから生ずる矛盾的要素の関連づけの執拗な努力であり、P・ゲイの、どちらかといえば、ワイマル文化に関するオプティミスティックな筆致に対して、本書全体を支配するペシミズムであつた。

もちろん、本書に対して不満がないわけではない。関連づけの努力は努力であつて、必ずしも、それが十分であつたという意味ではないし、対象範囲の拡大によつて被らなければならなかつた、各分野における分析度の浅さも否めない。しかし、著者が「序文」で断つているように、本書は、時代精神の全体像をできるだけ正確に伝えるために、「その文化の一翼を担つたさまざまの個人や集団や学問分野の一つ一つについて、かなり詳細に取り扱うことができなくなる」欠点を熟知した上での選択であれば、評者の不満は、ないものねだりにすぎず、本書は当初の目的を十分に果しているとしなければならない。なぜなら、本書によつて示されたワイマルの全体像を手懸りに、更なる研究が、今まさに行われているからに他ならない。

最後に苦言を一つ申し添えさせて頂くならば、「本書の内容が決して教科書的な堅苦しい『ワイマル文化史』概説ではなく、……レヴューのスター、ボクサーさらには大詐欺師まで登場させて描き出された、まことに華麗で賑やかなワイマル文化絵巻となつている」という理由から、原題を『ワイマル文化を生きた人びと』に変更し、巻末の参考文献を削除した意図は理解できるにしても、むしろそのような性格の本書であるからこそ重要な意味をもつ三二ページにわたる写真の削除を、残念に思うものである。

（ミネルヴァ書房・一九八〇年・二六〇〇円）

一九八〇年一〇月三〇日脱稿　　中道寿一